市政会
丸山忠男議員

○コロナ禍における観光の産業化について

その他の質問
- 市長在職５期20年を振りかえって

※Park-PFI：飲食店、売店等の施設設置と、その施設から生じる利益を活用して、周辺の園路等の整備改修を一体的に行う者を公募により選定する制度
※パラダイムシフト：社会全体の価値観の変更

問 勝山市が進めてきた道の駅「恐竜渓谷かつやま」、観光案内・飲食物販施設「ジオターミナル」、「旬菜食祭　花月楼」の3拠点が整備され、観光の産業化への力強いステップアップが確立された。

勝山市の観光は通過型で、観光客にゆっくりと楽しんでいただくためには宿泊施設の確保が課題と言われてきた。そこで、勝山市では道の駅の隣接地にイチゴ栽培ハウスなどが進出してくるのに加え、ホテル等を誘致する構想がある。また長尾山総合公園に※Park-PFIを活用した事業を展開しようとしているが、そこにもホテルの建設を視野に入れている。ただ、問題はコロナ禍において、これらの事業をどのように進めるかであると考える。

ウィズコロナ、アフターコロナを踏まえて、理事者が今後どのように取り組んでいくのか見解を伺う。

答 国のGoToトラベル事業等の波及効果や6月の道の駅オープン、恐竜博物館再開などにより、夏以降は徐々に観光入込客数に回復の兆しが見られたが、11月以降、再び新型コロナウイルスの感染拡大が起こり、今後も防止対策を講じつつ、慎重に観光業の回復を進めていく必要がある。

勝山恐竜の森には、まだ十分な開発可能な面積が残っており、2期事業エリアには、都市公園用地として51haの未買収用地もある。県立恐竜博物館のリニューアルに合わせ、コロナ以後の※パラダイムシフトによる新しいフェーズに対応し、エンターテインメント性を備えた魅力ある長期滞在型の公園を目指し、Park-PFIでの整備を視野に入れている。

道の駅エリアにも事業展開が可能な土地を確保しており、コロナ以降の新しい観光の方向性を踏まえて地域経済の活性化が図れるよう、山岸市政をベースに新市長のもと、観光の産業化を一層推進していく。

新風会・公明
竹内和順議員

○山岸市政エコミュージアムまちづくりについて
○新型コロナウイルスによる財政の影響について

その他の質問
- 健康長寿について
- イトヨの保全活動について

※ESD：持続可能な開発のための教育

問 山岸市長は、平成12年に市長就任以来、「エコミュージアムによる　ふるさとルネッサンスの実現」を基本理念に、市民と一体となってまちづくりを進め、ふるさとの魅力を醸成することを目指してきた。市長就任期間の5期20年間を振り返り、エコミュージアムによるまちづくり構想への思いを伺う。

答 展開してきたエコミュージアムからジオパークに至る最大の成果は、この理念を小中学生の教育に活かし、郷土の歴史学習や自然環境の保全活動など、※ESDに取り組んできた結果、「勝山市が好きだ」という生徒の割合が増えてきたこと。

ふるさとに愛着と誇りを持った次世代が着実に育っていることに、未来への大きな期待を寄せている。

問 新型コロナウイルスの感染拡大により、財政悪化は必至で、国に交付金の追加、あるいは増額を求める声も出ている一方、自治体独自の策も必要不可欠と考える。

当市の財政再建策、そして、新年度予算編成に向けて効率的・効果的な財政運営が求められているが、市の見解を伺う。

答 中学生以下の子ども1人につき6万円を給付する「かつやまっ子元気応援臨時給付金」など60を超える新型コロナウイルス感染症対応事業を展開し、その事業費総額は33億3900万円に上るが、国の交付金制度を最大限活用し、その全額を概ねカバーできると考えている。

令和3年度の予算編成では、財政運営を取り巻く環境は非常に厳しいが、新しい勝山に向けた投資は着実に積み重ねていくことが重要と考え、これまで築き上げてきた国や県とのパイプを更に太くして新たな財源を確保し、キラリと光り、市民の笑顔あふれる勝山になるよう新たな施策にも積極的に取り組みたい。